学芸員の体験重視論

―民俗資料展示の前提として―

後　藤　重　巳

1.　学芸員講座に於ける製作実習

博物館の展示活動に於いては展示品の展示に際し、動・静の二面的な面への留意が不可欠である。

この動的とは「展示品が動く」と言う単純な展示法を言うのではなく、展示品の製作材料や製作工程、使用時の時代背景、地域背景にまで留意し観容に対して、展示品の歴史性、地域性を充分に理解させるための方法と言うことである。

各地の各種の博物館を訪ねると、展示品の前には、往々にして「手を触れないで下さい」との注意書きを見る場合が少なくない。

近時の博物館展示では、展示品の複製を作製して、これを観客に転動させる方式の例も多くなったものの、これも作製実習の指導と併せて、まだまだ普及に努むべき必要がある。

この為には、学芸員養成講座に於いては、受講者に対して、徹底した製作実習と転動実習を通じて、展示さるべき展示品物に対する充分の教育と理解をもたせることが急務であろう。

民間に於ける生業関係資料の中で、例えば農耕用具（農具）では、これを実際に使用させてみることを試みることを怠っては農具を論じ、農具の展示を担当する学芸員としての資格はないに等しい。

こうした観点から、本学に於ける当講座の実習Ⅲ（民俗資料）では、製作実習に力点を置こうとする試みが続けられている。

以下、筆者の試みとして行った竹製品製作実習と、藁加工実習について述べてみよう。

2.　竹加工実習

戦後著しい速度で進んだ化学工業の発達は合成樹脂の研究を進め、その製成品の普及を極度に高めた。

しかし、この合成樹脂製成品の民間への普及は日本の庶民生活の内から日常生活に活用された伝統的な竹製品を駆逐すると言う悲しむべき現象を生じた。

周知の如く、竹は東南アジアの特産品であり、殊に日本には、変種まで加えると、約１５０種があるといわれ、日本はまさに、竹類の産地としては世界の最大特産地であると言える。

竹は、中空で、割裂性をもち、弾力はあり抗圧力も大きい上に、乾湿による伸縮度が少なく、加工上では彎曲的な利用法にも富む。この様な用材としての竹は、竹製品の形状や製品の用途によってその種類が限定されはするが、主として用いられる竹の種類は、孟宗竹、苦竹（まだけ）、淡竹（はちく）、箭竹、女竹などである。

竹の利用分野は極めて広い。これをここに全覧

する紙面的余裕はないが、家屋の建築用材としてまた特に日常の食生活に於ける諸用具としての台所用器具には、過半の器具に竹が利用されて来た。

この外、衣生活では装身具にも加工利用されたし、生産器具（用具）の内にも、ここで列挙するにいとまない程の利用例が見られる。

竹はこの様な、いわゆる道具、用具ばかりではなく、春季の発芽期には「竹の子」として、今日尚重要な食用となるばかりでなく、成竹の「竹の花」も食用となり、内皮のウスマクは薬用として用いられ、外皮に附着する黄色の苔は「雀の飯」と呼ばれ、飢饉時の食料として用いられていた事実がある。

更に子供の世界では、竹を加工利用した玩具が少なくないし、竹本体ばかりでなく、その皮さえもが傘・草履に用いられるなど、竹の利用の分野は、はかり知れない広がりを持っている。植物遺物の遺存例は少ないが、原始時代にあっても、竹の利用は決して少なくなかったものと推測することは可能である。

さて、この様に、かっては日常の庶民生活とは不可分の関係にあった竹とその利用とは前述の如く、プラスチックの普及によって我々の生活の周辺から急速に姿を消して行きつつあるが為に、博物館に於ける展示資料としては、竹製品は大いに注目さるべき民俗資料として取り扱われ始めて来た。

こうした点から、本学博物館学講座では、博物館実習Ⅲ（民俗資料・後藤担当）では、竹の利用と、その加工法についての実習時間を設けたのである。

使用した竹の種類は、比較的加工し易く、利用度の圧倒的に高い苦竹（まだけ）を用い、先ず竹の割り方を指導した。

竹は鋭利な刃物でなくとも見事に割れると言う事実は受講生の興味を引いた様である。

ついでナイフを用いての細割方法や、皮質部と肉質部の剝離方法の指導、続いて「籤（ヒゴ）」のそぎ方などに移った。

其後、細割した竹を用いて受講生に任意に製品作成を行なわせた。

学生の実習作業状況を観察していると、節を残して輪切りしたもので灰皿を作るもの、皮質部を用いてアンペラを組むもの、竹トンボを作るものこの外、ペーパーナイフ、スプーン、孫の手、花筒、短冊さしなど思い思いに趣向をこらして製品作成に興味を示した。

ストーブの余熱を利用して加熱法によって竹を自由に湾曲させる方法をも指導。

時間的制約と設備的条件からいわゆる「油抜き」の実習までは及び得なかったが、この実習には、受講生は予想外の関心と興味を示し、竹材と竹製品に対する理解を深めるために、何らかの指導上の効果はあったものと思う。

（二）　藁加工実習

稲作文化圏にある日本では、稲はその果実としての籾（米）のみでなく、籾藁の利用法も広い分野に及ぶ。

建築材としては壁土に混じる「ツサ」を始め、畳の床材等に利用され、生産用具としては藁莚や藁縄、藁ミノ、草履など、これも極めて利用範

囲が広く、貴重な用材であり製品も民俗資料として重要視される。

竹の利用が、遠く原始社会にあっても相当の広がりをもっていたであろうことは予想に難しくないところであるが、粗密の差こそあれ繊維質のものを撚り合せて紐状にし、又は経緯を織って網状にする技法もすでに縄文時代に存在していたことは周知の事実である。

実習に於ける「藁縄ない」の六十余名の受講生中、数名の学生以外は、全く縄をなえないと言う現実は、指導者の私自身に一種の恐怖感を与えた

懇切な指導の結果、一時間以内には、大半の学生がどうにか、撚り入れの技術（コツ）を感得して縄を撚れるようになった。

この実習では、藁をすぐる（はかまをとる）こと。湿を加えて柔軟になるまで打つことを説明指導し、作業に入った。

殆んどの学生が縄を撚れるようになった時点で草履、ワラジ等の網み方の実習に入ったが、これには、受講生は大いに関心を示した。別に「鼻緒」をつける『草履』と基本になる芯縄をそのまま利用して「鼻緒」とする〔ワラジ〕や〔足なか〕の基本的な分岐点となる「あみ始め」の原理を、完成した草履、アシナカを用いながら指導しながら実習作業を進めた。

時間を経て完成されたものはその殆んどがおよそ、「草履」「アシナカ」とは似つかぬ形状のものではあったが、この実習の目的は、藁を用いて縄をない、その縄を用いて網むと言うことであるので、所期の目的は充分達成されたと自己評価している。

以上、二種の製作実習を通じて共通に学生に指導徹底せしめたことは今日いわゆる「博物館入り」する民俗資料は、かっては、民衆の間で極く普通に作成され、使用されたものであったこと、一つの材料が極めて多目的に加工、利用されたことであり、博物館の殿堂入りした展示品としての民俗資料は、極めて高尚な美術品にも対比する「製品」として陳列されるけれども、これらもその完成された形をとるまでには、人々の永い生活の経験の中から、逐次工夫に工夫が加えられ、製作者の熟練によってこそ、始めて完成されるものであることを強調指導した。

本学学芸員講座では、この三年は、鍛治屋における鍛治実習、ダルマ人形作成の現地見学の外、紙漉場、民陶窯場実習を行なって来たが、こうした実習を重ねるにつけても、民俗資料の博物館での展示的扱いには、益々製作実習の必要性を痛感するものである。

昭和５３年度の計画としては、農耕器具の農事暦に応じた使用実験を行ない、いわゆる「道具」はいかに使用するのかについて徹底した指導を行なう予定でいる。各地に開設されている歴史民族資料館では、その展示品に占める農具の比は高い。

しかし、そうした農具の展示は、単なる収集、展示に終始する例が少なくなく、これらもやがては、系統だてた展示法を用いた科学的展示法に改められなければなるまい。